

Architekton

首都圏

2017 March



東京家政学院大学 原口秀昭研究室 不動産の視点を加えた建築教育



東京家政学院大学は、94年の歴史を持つ女子教育の伝統校。知 (Knowledge)、徳 (Virtue)、技 (Art) の育成を旨とする建学の精神「KVA精神」に基づき、自立した人材の育成を目指す。衣食住全般を学べる現代生活学部生活デザイン学科では、2年次以降に専門の分野を選択。住分野は建築士を目指して入学する学生と入学後に建築に興味を持った学生の両方が在籍している。卒業後の進路はハウスメーカーやゼネコン、リフォーム会社が多い。近

年は建築士資格の取得支援に力を入れ、合格率も年々高まっているようだ。

図書館などの 改装設計を担当

原口秀昭教授は、町田キャンパスで2012年から順次行われた内装改修の設計を担当。学生ラウンジ「ローズコート」や食堂、図書館、コンビニ、トイレなどをリニューアルし、白を基調に

サーモンピンクやショッキングピンクでアクセントをつけた。コストを抑えつつ、かわいらしい家具や照明をそろえ、女子大らしい魅力的なデザインに仕上がっている。

原口教授は自らの設計事務所で住宅や店舗、ホテルなどさまざまな設計実務に携わった後、1997年から教壇に立つ。教職の傍らで長年続けているのが書籍の執筆だ。東大大学院時代からイラストと文章を組み合わせた表現方法で、ルイス・カーンやフランク・ロイド・ライト、ル・コルビュジエなど20世紀を代表する建築家の作品を比較・分析した著作を発表してきた。

イラストを交えた解説本を執筆

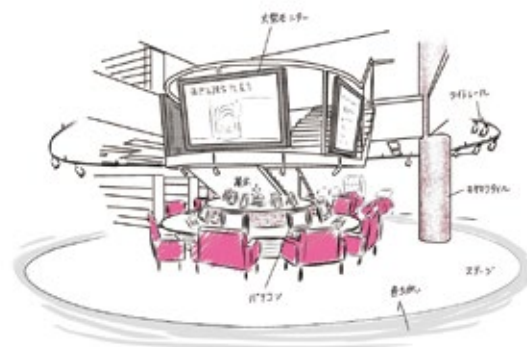
構造から設備、法規まで建築の基礎をマンガを交えてわかりやすく解説した「ゼロからはじめる」シリーズは現在14冊が刊行され、学生や建築士を目指す人のバイブルとなっている。毎日更新しているブログの記事を書籍にまとめたもので、文系出身者の多い学生にも分かりやすいと好評だ。東大時代の恩師で14年に亡くなった建築史家の鈴木博之氏からは生前、執筆を続けるよう何度も励ましを受けたという。「毎日早起きして出勤前にイラストを描く生活を続けています。大変ですが、先生の教えを守り続けたいと思います」と笑顔を見せる。



原口教授の著書「ゼロから始めるシリーズ」は中国語、台湾語、韓国語にも翻訳されている



町田キャンパスの 内装リニューアルを実施



原口教授のスケッチ



図書館吹き抜け空間を改装した



パソコンカウンター



図書館内に雑誌などを閲覧できるくつろぎスペースを設置



学生ラウンジ「ローズコート」



コンビニもピンクで統一



中古物件のリフォームに学生が参加



学生の指導で重視しているのが不動産の視点を加えた建築教育だ。「建築も完成すれば不動産になります。大学では建築と不動産は別の学問領域ですが、実社会では重なる部分が多くあります」と話し、建築と不動産両方の知識を持つことの重要性を訴える。リフォームで中古物件の価値を高めて貸し出す不動産経営に、建築の専門家がかわかることでより効率的な運営ができるというのが原口教授の考えだ。

自身も中古アパートや戸建て住宅を約50世帯運用している。所有物件を利用して、断熱材を入れたり壁の塗り直しをしたりといったリフォームの実践的な演習も行う。「古い物件が見違えるようにきれいになると、学生が目が輝きます。自分たちでもここまですることができることに感動するようです。これからのストック時代を見据え、ハウスメーカーもリフォームに軸足を移しつつあります。大学で学んだ知識が将来役に立つでしょう」

21 世紀は女性の時代

建設現場や工場の見学も積極的に授業に採り入れている。実際に自分の目で見てみると現場に興味がわくようで、見学をきっかけに施工管理職を志望する学生も多い。高校時代に保育士志望だった学生が、ゼネコンに就職する例もあったという。建設業界全体で女性の活躍に追い風が吹く中、学生側でも建築士など資格取得に励み、建築技術者として働き続けたいという意欲が高まっている。



原口秀昭教授 一級建築士
はらぐちひであき
1959 年東京都生まれ
1982 年東京大学工学部建築学科卒業
1986 年東京大学大学院修士課程修了
設計事務所勤務を経て 1997 年東京家政学院大学家政学部助教授
2010 年東京家政学院大学現代生活学部教授

原口教授は、学生に対し建築や不動産の技術を強みにしてほしいと訴える。「21 世紀は女性の時代。女性が活躍しなければ日本は成長しません。これから先、建築技術者はどんどん減っていきます。60代50代の一級建築士がそれぞれ10万人いるのに対し、20代はわずか5000人。学生たちには、しっかりと技術・知識を身につけ、社会に求められる専門家になってほしいです」。



授業の一環で福祉施設の建設現場を見学



何でも相談できる先生です

質問項目 ①原口研究室を選んだ理由 ②原口先生の好きなところ



浅川知香子さん
あさかわかこ
学部4年
①子供のころシルバニアファミリーで遊んでいて住宅に興味を持った。原口研では自分の思い通りに設計ができる。
②自分の好きなことをしても受け入れてくれる。学生目線で物事を言ってくれる。



井上夏菜さん
いのうえかな
学部4年
①原口先生に惹かれたから。卒業制作を作りたい。
②思ったことをはっきりと言ってくれる。学生の思いを尊重してくれるところ。



栗山千秋さん
くりやまちあき
学部4年
①初めは食分野を選んだが、他大学では学べない住宅に変更した。将来役に立つと思った。原口研は自由な雰囲気。
②建築家は近寄りたかったが、フランクで話しやすい。就職の相談にも乗ってくれる。



五ノ井春香さん
ごのいはるか
学部4年
①卒業制作を作りたいから。
②学生との距離が近く、親身になってくれるところ。



清水綾乃さん
しみずあやの
学部4年
①工作や美術が好きで建築の道へ。理数系が苦手だったが先生の本を読んでがんばってみようと思った。
②お父さんのような存在。ドライな所もあるが居心地がよい。



杉野沙織さん
すぎのさおり
学部4年
①1年の頃から名前を覚えて気にかけてくれた。先生が設計した和風の木造建築が好きだから。
②人脈が広い。通りがかりに話しかけてくれるなど優しい。



中込友実さん
なかごみともみ
学部4年
①折り紙など立体のものを作るのが好き。意匠設計を学びたいと考えて、原口研は自由に研究が進められると思った。
②優しい。色々とアドバイスをしてくれる。



中澤瑠美さん
なかざわ るみ
学部4年
①美術やデザイン、創作に興味があり、自分の好きなものを設計したかった。
②卒業設計の進ちょくなど学生ひとりひとりの様子を見てくれる。距離が近く、相談しやすい。



永田未結さん
ながたみゆ
学部4年
①卒業制作を作りたいから。
②話しやすい。学生の自主性を重んじてくれる。



濱田奈那さん
はまだなな
学部4年
①両親の影響で建築の道へ。1年の時に先生が主催する欧州建築旅行に参加し、お世話になった先生の下で研究したいと考えた。
②面倒見が良い。先生との距離が近い。

東京家政学院大学 深石圭子研究室 建築の力で地域の課題解決を目指す



東京家政学院大学生活デザイン学科の深石圭子助教は同大大学院の卒業生。現在は5人いる建築系教員の一人として、2014年から学生の指導を担当している。住居学を専門とし、これまで郊外のニュータウンを対象とした戸建て住宅の設計提案や19世紀英国の労働者向け集合住宅に関する研究などを進めてきた。大学が立地する東京・多摩地域の自治体などからの依頼を受け、まちづくり関連のプロジェクトにも携わっている。

東京家政学院大学は、自治体や商工会議所、地域住民・企業などとともにさまざまな活動に参加。当時八王子ニュータウン「八王子みなみ野シティ」の地域活性化に取り組むNPO法人に参画していた深石助教は、コミュニティづくりの一つであるイルミネーションイベントの企画を担当した。修士論文のテーマとして同地区の住宅設計提案に取り組んだ縁もあり、裏方として地域を盛り上げた。

2012年に庁舎を移転・新築した町田市では、集約化で使われなくなった町田駅北側の中町第三庁舎の跡地利用検討に携わった。庁舎の移転で人の流れが変わり、集客力の低下を懸念した地元の商工会議所や商店街から大学に相談が寄せられたことがきっかけ。深石助教は、住民の意見を聞いた上でバスターミナルを設置する案を提示した。学生も地域への説明に使う模型製作などを手がけた。住民との対話や計画案のプレゼンといった場を経験できたことは大きな学びにつながったようだ。

建築家・中原暢子氏を研究

深石助教が現在取り組んでいるのは、東京家政学院大学出身の建築家、故中原暢子氏の研究。新制大学制が始まり、女性が正式に大学の建築教育を受けられるようになった1950年代以降に活躍した女性建築家のパイオニアの一人で、約50年の間に約100件の建築を設計した。1958年に林雅子、山田初江両氏とともに林・山田・中原設計同人を設立し、1985年からは住居学科の教授も務めた。深石助教は大学



HP シェルを4枚組み合わせた形状の長覚院の屋根(左)。図面も残されている。



が保管する中原作品の図面の分析を実施している。作品の大半が住宅だが、茶人でもあった氏の美意識が表れる茶室など優れた作品も残している。
中でも意欲的な建築は、さいたま市浦和区の寺院、長覚院（1962年竣工）。当時としては珍しかったHP シェル構造の屋根を持ち、打放しコンクリートが形作る直線の本堂に屋根の曲線が柔らかさを与えている。東京オリンピックに向けてシェル構造への関心が高まっていた時代に、伝統を重んじる寺院建築と最先端技術を融合させた先進性が高い評価を得た。現地を訪問して職人に話を聞いた深石助教は、「建て替えの可能性もあるようですが、研究を通して歴史的価値のある建物だと示すことはできたと思います」と話し、保存への期待を語る。

建築士資格を強みに

多くの学生がインテリアに興味を持って入学するが、戸建て住宅からより大きな建築へとステップアップしながら演習を進める中で、建築士を目指すようになる学生も多いという。文系学生にとって構造力学は敬遠しがちな分野であるため、大学では希望者に補習を実施する

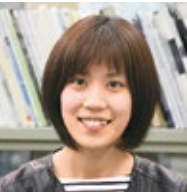
など支援に努めている。「一級建築士の資格は社会に出てから大きな強みになると学生には伝えています。女性は結婚や出産といったライフイベントで立場や環境が変わりやすいですが、その変化を負担に思わず、楽しんでほしい。いったん仕事を離れたとしても、建築の知識や資格を生かして再チャレンジしてほしいと思います」。



深石圭子助教 一級建築士
ふかいしけいこ
1978 年神奈川県生まれ
2001 年東京家政学院大学家政学部住居学科卒業
2004 年東京家政学院大学大学院人間生活学研究科生活文化専攻修士課程修了
2010 年東京家政学院大学現代生活学部助手
2011 年東京家政学院大学現代生活学部助教

知識を生かして建設・住宅業界で活躍

質問項目 ①深石研究室を選んだ理由 ②深石先生の好きなところ



清祐美子さん
せいゆみこ
学部4年
①小さいころから住宅のチラシが好きで、建築に興味を持った。深石研では幅広い建築の設計を学べるから。
②学生の作品をしっかりと理解してくれる。マイペスの学生をいい意味で焦らせてくれるので、自分のためになっている。



高山晴奈さん
たかやまはるな
学部4年
①もともとインテリアやものづくりが好き。1年次は家庭科を学んだが2年次から住分野に専念。計画性があり、細かい部分まで指示を出してくれる先生のもとで研究すれば、力を発揮できると感じた。
②優しい。気軽に話かけやすい。



2010年に開催したイルミネーションの様子。現在は町内会等の住民主体で継続されている。